

絲綢之路しるくみち

—— 歴史幻想 ——

朽尾 武

飛鳥の官人も京の都人も江戸の文人も差こそあれ遙かなるカラ国に思いを馳せ、はてしなく続くシルクロードに思いを寄せ、ロマンをかき立てられていたに違いない。旅せぬ筆者も、古人の文や地図に古代への想いが、いやすのである。古人と同感して幻の世界にひたりながら、歴史に遊んでみたい。

- 一 荆門山
- 二 無恙
- 三 鱸魚の膾
- 四 燕支の山

一 荆門山

李白の「秋に荆門を下る」という七言絶句がある。

霜落荆門江樹空 霜落ちて荆門江樹空し

布帆無恙挂秋風 布帆恙無く秋風に挂る

此行不為鱸魚膾 此の行、鱸魚の膾の為ならず

自愛名山入剡中 自ら名山を愛して剡中に入る。

荆は楚（湖北省）の古名。荆門山は湖北省の西北にあって長江を夾んで虎牙山と対峙しており、それが、あたかも門のように見えるから言う。水経注三十四江水に次のように書



荆門山

霜落荆門江樹空布帆無恙掛秋風
此行不為鱸羹鱠自愛名山入刻中

秋下荆門
木寺白

かれている。江水は長江（揚子江）である。
又東過夷陵縣南
〔注〕江水又東歷荆門虎牙之間。荆門在南、上合下開。
：此二山、楚之西塞也。水勢急峻。故郭景純江賦曰、
虎牙嶭豎以屹率、荆門闕竦而磬礪、円淵九廻以懸騰、
溢流雷响而電激。
又、東の方夷陵縣の南を過る。
〔注〕に江水は又、東の方荆門・虎牙の間を歴る。荆門
は南に在つて、上合し、下開けり。：此の二山は楚の
西塞なり。水勢急峻たり。故に郭景純は江賦に曰へ
り、虎牙嶭豎として以て屹率たり、荆門闕竦として磬
礪たり。円淵九廻にして以て懸騰せり。溢流雷响して磬
電激すと。
荆門は上が合わさつて、下が開けているので門といつ
た。西塞は楚の西の国境をいう。郭景純は郭璞をいう。江
賦は文選に見える。嶭豎は江戸時代の版本では嶭豎トイチ
シルンウンテと文選読みをする。文選の李善の注による
と、嶭は特立の兒とす。豎は樹、すなわち立つの意。屹率
トタカクサカン、高峻の兒。闕竦は闕（門）の如く竦の意。
磬礪は、磬礪トヒロクオホキナリ、廣大ノ兒と注す。いず

れも荆門のさまを写す。円淵とは文選の五臣の張銑によると、「峽の間、江水深うして急に岩石に激して円を成して流る。故に円淵と云ふ」と注す。九廻は淮南子の九旋之淵の許慎注を引いて「至って深い淵」とす。張銑は「九廻とは深くして九泉（奥深い泉）に至る」と注す。懸騰はわき立つ意。李善注、「騰は水の涌くなり」とす。溢流は水のわき流れるさま。雷响は雷の如く响える意で波音の形容。李善注は、盛弘之の荆州記を引いて次のようにいう。

郡西沂江六十里、南岸有山、名曰荆門。北岸有山、名虎牙。二山相对、楚之西塞也。虎牙石壁紅色、間有白文如牙齒状。荆門上合下開、開達山南有門形、故因以爲名。

郡西に江を沂よぼること六十里、南岸に山有り、名づけて荆門と曰ふ。北岸に山有り、虎牙と名づく。二山相對し、楚の西塞なり。虎牙は石壁紅色、間に白き文有りて牙齒の状の如し。荆門の上合し、下開き、山南を開達（開けとおる）し、門の形有り、故に因りて以て名となす。

二つの文は相類した内容であるが、荆門の形、峽門の江水が急に岸石に激し、円く渦巻き、どこまでも深く、浪騰

き上り、波溢かき流れるさまは雷声のようで、電いなすまのように激するさまがうかがえる。

二 無恙

無恙むようとは「つつがなし」と読んで、憂いの無い意であるが、後世虫の名とする俗説も生まれた。恙は中文大辞典（中国文化研究所刊）によると、次の解を示す。

○憂也。説文、恙、憂也、从心羊声。段注、古、相問曰不恙、曰無恙、皆謂無憂也。

○憂なり。説文に恙は憂なり、心に从したがひ羊声なり。段注に、古には相ひ問ふとき、不恙と曰ひ、無恙と曰ひ、皆な憂ひ無きを謂ふなりと。

説文（解字）は後漢の許慎の著わした語源字典。段注は清の段玉裁の書いた説文の注釈書で最も基本的なもの。段注によれば、挨拶言葉として不恙、無恙の語が使われたという。その他に、爾雅釈詁、広韻、史記平津公主文伝の例も示す。この解が無恙の基本義である。

○病也。広韻、恙、病也。漢書賈誼伝、皆亡恙、注、師古曰、無恙、謂無憂病也。…。太平御覽人事部、心、

風俗通曰、俗説無恙、無病也、凡人相問無病也。

◎病である。〔広韻〕に恙は病である。漢書賈誼伝に、皆な恙亡しと、注に師古曰く、無恙は憂病無きを謂ふなり。：。太平御覽人事部、心に、風俗通に曰く、俗説に

無恙とは無病である。凡そ人、病無きを相問ふなり。

師古は唐の顔師古をいう。漢書の注で知られる。風俗通は後漢の応劭の著。無恙は病無きかという挨拶言葉として使われる。

◎噬虫、虫名、与蛭通。：風俗通、噬虫、能食人心。

古者草居、多彼此毒、故相問勞曰無恙。如戰國策、趙威后問齊使曰、王亦無恙。説苑、魏文侯語倉庚曰、擊

無恙。前漢武帝報公孫弘曰、何恙不已。晉書文苑、顧愷之与殷仲堪箋、布帆無恙。隋書、日本遣使致書、皇

帝無恙。皆問勞之辭也。

◎噬虫は虫の名、蛭と通ず。：風俗通に、噬虫は能く

人の心を食べふ。古は草居し、多くは此の毒を被く、故に勞を相問ふて恙無きかと曰ふ。戰國策(齊策)の如きは趙威后、齊使に問ふて曰く、王も亦た恙無きやと。

説苑(奉使)に魏文侯、倉庚に語りて曰く、擊恙無きかと。前漢の武帝、公孫弘に報じて曰く、何んぞ恙已ま

ざるやと。晋書文苑(伝)に顧愷之、殷仲堪に箋を与へて、布帆恙無きやと。隋書(倭国伝)に日本、使を遣し書を致す、皇帝、恙無きかと。皆な勞を問ふの辭なり。

この文は今の風俗通には伝えぬ。ただし、個々の文は出典が明らかで、心勞(病)なきやと解している。噬虫はかむ虫、すなわち恙虫を指す。説苑の倉庚は倉唐、擊は魏の文侯の太子擊。晋書の顧愷之の文は、李白の詩の原拠。隋書の倭国伝の文は「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きか」といった有名なことば。輟耕録無恙 参照。

◎患獸名。与恙通。輟耕録無恙、神異経曰、北方大荒中有獸、咋人則疾。名曰恙。恙、恙也。嘗入人室屋、黄帝殺之、人無憂疾、謂之無恙。

◎患獸の名。恙と通ず。輟耕録無恙に、神異経に曰く、北方大荒中に獸有り、人を咋へば則ち疾む。名づけて恙と曰ふ。恙は恙なり。嘗て人の室屋に入り、黄帝之を殺し、人に憂疾無し、之れを無恙と謂ふと。

輟耕録は明の陶宗儀の著。無恙は卷四に見られるが◎の風俗通の引用文すべてが引かれ、おそらく、これを風俗通

に誤ったものであろう。

辞書の意味として、①②のほかに③無事、④猶著（著く）について説くが省略する。先行の諸橋大漢和辞典を中（文大辞典は襲っているが、やや解釈を異にするもの）、大筋は同じである。

恙虫は学名を *Trombidum* sp. といい、節足動物、蜘蛛類のケダニの幼虫で、野鼠に寄生し、人をかむと、めくらみ発熱し、重い場合死に到る。そのため恙無きかという挨拶ことばまで生れたわけである。

ここで注目すべき主題は李白詩の承句、「布帆無恙挂秋風」の典故となる顧愷之の逸話である。晋の顧愷之は絵画史において特筆すべき人物。伝は晋書文苑、顧愷之伝に見えるが、古くは六朝宋の劉義慶の手になる世説新語排調にも載せる。

顧長康作殷荊州佐、請仮還東。爾時例不給布帆。顧苦求之、乃得発。至破冢、遭風大敗。作牋与殷云、地名破冢、真破冢而出。行人安穩、布帆無恙。

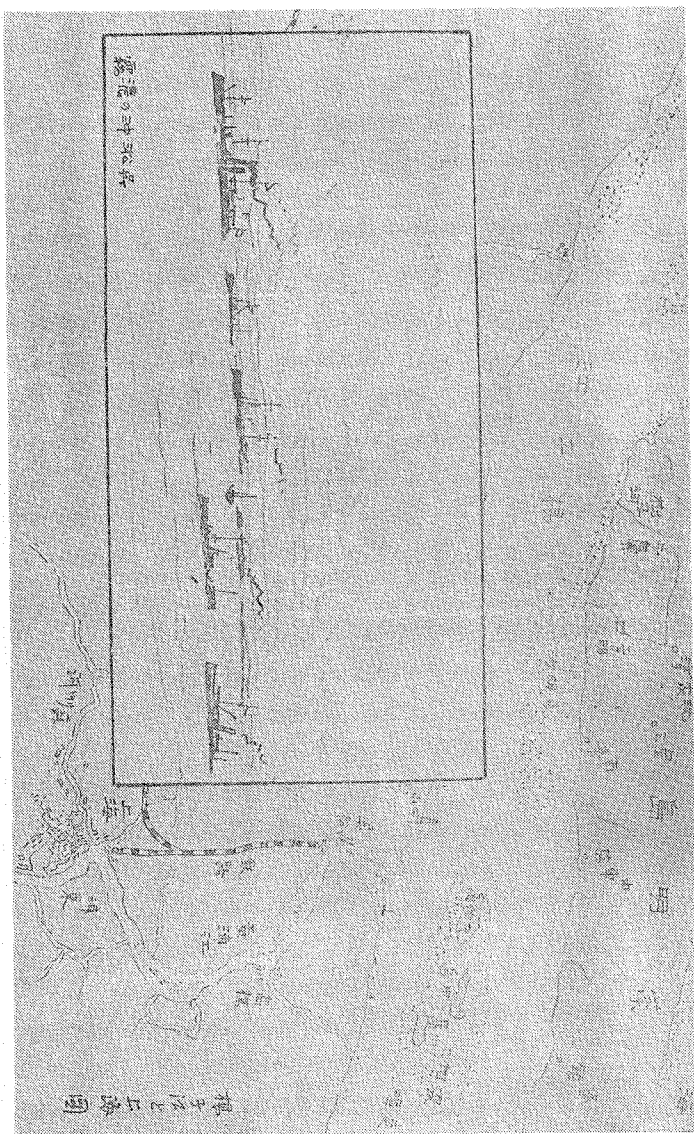
顧長康（顧愷之）は殷荊州（殷仲堪）の佐（幕僚）と作り、仮を請ひ東（會稽）へ還れり。爾の（當）時、布帆（布帆）を給せざるを例とす。顧、苦くこれを求め、乃ち発する

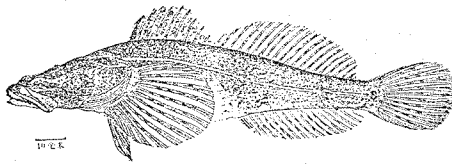
を得たり。破冢に至り、風に遭ひ大いに敗つ。牋（手紙）を作り殷に与えて云ふ、地破冢と名づく、真に冢を破つて出でたり。行人安穩、布帆無恙しと。

ここで言う破冢は地名で、湖北省監利県の地。顧愷之は、その伝に「諧謔（しゃれことば）を好む」と言われるが、破冢すなわち冢を破つて死地を逃れるというしゃれをやったわけである。李白は、この故事を利用したのである。

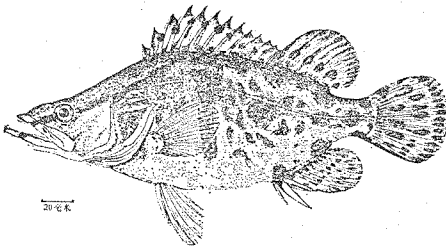
三 鱸魚の鱠

同じく李白の句中の言葉であるが、これも晋の張翰という人物の故事をふまえている。この故事を説く前に鱸魚とはいかなる魚であるか、説明を要する。ここに長江魚類（湖北省水生生物研究所魚類研究室編、科学出版社、一九七六年）という本がある。その中で、鱸形目 *Perciformes* に鱸亞科 *Olgorinae* の鱸 *Lateolabrax japonicus* があり、これが、日本でいうスズキである。このスズキは長江（揚子江）河口の淡水域にも多数生息し、江蘇一帶の喜好するところのものと説かれる。李白や張翰の言う鱸とは、これと類を異にし、鮠目 *Scorpaeniformes* 杜父魚科 *Cottidae* の松江鱸

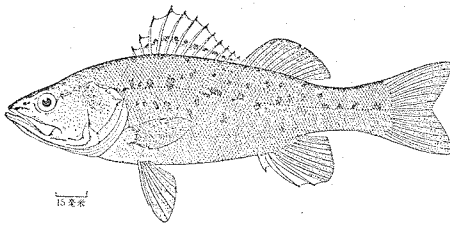




松江鱧 *Trachidermus fasciatus* Heckel
ヤマノカミ



鰻 *Simiperca chuatsi* (Basilewsky) ケツギヨ



鱧 *Lateolabrax japonicus* (Cuvier et Valenciennes) スズキ
長江魚類 (科学出版社)

Trachidermus fasciatus Heckel を指す。和名をヤマノカミといいいカジカ属の魚である。日本での分布は有明海灣に注ぐ、筑後川（アイカケと称す）・矢部川・住の江川等の中流から下流域に分布する（保育社版、原色日本淡水魚類図鑑、二九八頁）。中国では呉淞江 *wusong jiang* のものが有名で、学名にもなった。この呉淞江は江蘇省境にあり、古くは笠沢と称した。また呉江、松江、南江、淞陵江、呉淞江とも称した。俗に蘇州河と名づく。源は太湖より出で、東

北に流れ、呉江、呉県、青浦、松江、嘉定等の県を経て上海に至り、黄浦江に合し、海に入る。太湖より海に入る唯一の幹流である。江口を呉淞口といい、長江の咽喉を扼え、中国東南の重要な門戸である。（中文大辭典による）この度は詩文の多くの例はさしおいて、松江鱧はいかなる魚か、また、その逸話とはいかなるものかを紹介するにとどめたい。

松江鱧は古今圖書集成 禽虫典、鱧魚部によると四腮魚しさいぎよ 体草

綱目、脆鱸せいら丹徒縣志、爛鱸らん丹徒縣志、鱸較 山陰縣志の異名をもつ。較は鰕しやうの誤りか。丹徒縣は長江流域にある江蘇省鎮江県の東南。山陰縣は浙江省紹興県の地名。松江鱸は長江口浙江省の中小河川及び周辺の河口近くに住むので、この異名のある地域の生息は考えられる。明の李時珍が、歴代の本草類を整理集大成した本草綱目鱸部魚類鱸魚に次の文を見らる。

(釈名) 時珍曰、黒色曰盧、此魚白質黒章、故名。淞人名四鰓魚。

(集解) 時珍曰、鱸出吳中、淞江尤盛。四五月方出。長僅數寸、狀微似鰕、而色白。有黒点、巨口細鱗、有四鰓。楊誠齋詩頗尽其狀。云、鱸出鱸郷芦葉前、垂虹亭下不論錢、買來玉尺如何短、鑄出銀梭直是円。白質黒章三四点、細鱗巨口一双鮮。春風已有真風味、想得秋風更迥然。南郡記云、吳人獻淞江鱸餠於隋煬帝、帝曰、金盞玉鱸、東南佳味也。

(主治) ……作鱸尤佳孟詵。

(釈名) 時珍曰く、黒色を盧と曰ふ。此の魚、白質黒章あり、故名づく。淞人、四鰓(鰓)魚と名づく。(集解) 時珍曰く、鱸、吳中より出づ。淞江では尤も盛

なり。四五月方めて出づ。長さ僅かに數寸、狀微かに鱸(ケツギョ)に似ていて色白し。黒点あり、巨口細鱗、四つの鰓有り。楊誠齋(方里、一二四—二〇六)の詩に頗る其の狀を尽せり。云ふ、鱸は鱸郷(亭)芦葉の前に出で、垂虹亭下錢を論ぜず。買ひ來る玉尺如何短き、鑄出す銀梭直すら是れ円し。白質黒章三四点、細鱗巨口一双鮮なり。春風已に眞の風味有り、想ひ得たり秋風更に迥然。南郡記に云ふ、吳人淞江の鱸餠を隋の煬帝に獻ず。帝曰く金盞(うまいあえもの)玉鱸、東南(淞江の地)の佳味なりと。

(主治) ……鱸に作れば尤も佳し孟詵。

盧は日本でいうスズキのことである。黒いという意あり。白質黒章とは白い地に黒い斑点のあるをいう。四鰓魚とは集解に四つの鰓ありとすることからの命名、前えらぶた骨に四本の棘がある。この魚の旬は七八月頃であるが、四五月頃からもう美味だとする。鰕魚はケツギ属 *Siniperca* (Gill) のオヤニラミの仲間である。鱸郷は吳江(吳淞江)にあった亭、越の范蠡や晋の張翰等が像を亭傍に画いたという。(中吳紀聞) 芦葉の前とは川岸の芦の葉影に寄る鱸をいう。垂虹亭は江蘇省吳江県の東にあった垂虹という橋のためと

にあった亭。吳江に面している。錢を論ぜずとは鱸魚を買
うためには錢を惜しまぬことをいう。玉尺とは鱸魚、長さ
数寸の短い魚である。梭魚はカマスあるいはボラを言う
が、梭（機）の形に鱸魚をたとえたもの。

さて鱸とは膾と同義で、魚のそれであるから偏に魚を使
った。名義抄 仏中二五に「膾ナマス（観智院本）」と訓ず。

魚貝類の肉を細かく切った料理。後世のものは酢にあえた
ものをいう。料理そのものは現在の中国の江蘇料理に見ら
れ、日本でも作られていると聞か、如何なるものか知ら
ない。中山時子氏訳中国名菜譜 東方編（柴田書店）に四川腮

鱸を紹介されているが、これは煮魚料理である。中国菜譜

江蘇（中国経済出版社、一九七九年）には「鍋煽鱸魚」suō-tā-

hūyú と「清燴鱸魚片」qīng-huī-hūyú-piàn の二種が見え

る。前者は新鮮な鱸魚に生卵をといたものをぬり、小麦粉

をまぶして揚げ、油をきってからさらに調味料を加え、と

ろ火でやわらかくなるまで煮たもの。後者は鱸魚のすまし

あんかけ。鱸魚を油でいため、片栗粉に塩・砂糖を加え、

あんかけにしたもの。いずれも鱸ではない。

それでは歴史上有名な鱸魚鱸とは如何なるものか、その

一つは晋の張翰が故郷の吳江の鱸魚を食うため官を辞して

帰ったという話、これが、李白詩の原拠である。もう一つ
が、左慈という道士が、曹操の目前で術により吳淞江の鱸
魚をとり出して見るとい話で、後世の詩文はいずれかの
逸話を踏まえて作られている。

世説新語識鑿 張季鷹辟齊王東曹掾、在洛。見秋風起、

因思吳中菰菜蓴羹鱸魚膾曰、人生貴得適意爾、何能羈

宦數千里以要名爵、遂命駕便歸。俄而齊王敗。時人皆

謂為見機

世説新語識鑿 張季鷹（翰）は齊王の東曹掾に辟されて

洛に在り。秋風の起るを見て、因つて吳中の菰菜（ま

このの芽）、蓴羹（じゅんか）、鱸魚膾を思ひ

て曰く、人生、意に適ふを得るを貴しとするのみ、何

ぞ能く數千里（のところ）に羈宦（故郷を離れて任官する

こと）して以て名爵を要めんやと。遂に駕を命じて便

ち帰る。俄かにして齊王敗れり。時の人為に機を見る

と謂へり。

初唐に書かれた晋書文苑、張翰伝にはやや詳しく書かれて

いるが、ここでは省略する。蒙求に「張翰適意」の句が見

られる。古注蒙求是世説新語によって注されたと思われる

が、後の蒙求是晋書によっている。

張翰は風流人として後世に聞えているが機を見るに敏なる張翰の顔もまた描かれているのである。菰菜・蓴羹や鱸魚膾のためだけに職を辞したのではない。将来の事も考えて、ただその風流才子の評判にふさわしい引退の辞であったのであろう。同じく晋の陶淵明の「歸去來辭」も脈を一にする風流事であつたらう。

ここに張翰の思吳江歌（吳江を思ふ歌）がある。（全晋詩四所収）

秋風起兮佳景時 秋風起り佳景の時

吳江水兮鱸魚肥 吳江の水鱸魚肥ゆ

三千里兮家未歸 三千里あり家に未だ歸らず

恨難得兮仰天悲 恨めども得難し、天を仰いで悲しむ

この詩が張翰の詩かどうか疑わしいが、一座の興ともなる。唐の許渾は途經李翰林墓（途に李翰林墓を經る）と題した詩を作っている。李翰林は李白のこと。

氣逸何人識 氣の逸なる、何人か識る

才高举世疑 才高けれど世を挙げて疑ふ

禰生狂善賦 禰生狂ひて賦を善くし

陶令醉能詩 陶令酔ひて詩を能くす

碧水鱸魚思 碧水に鱸魚を思ひ

青山鵬鳥悲 青山に鵬鳥を悲む

至今孤塚在 今に至るも孤塚在り

荆棘楚江湄 荆棘あり楚江の湄

氣逸とは脱俗の氣象をいう。禰生とは禰衡をいう。禰衡

は後漢の人で、後、曹操の鼓吏（太鼓をうつ役人）となつた

が、その狂傲ぶりに怒り、後には卒に殺されるに至る。筆

を執れば千言立ちどころに成つたと言われる。蒙求に禰衡

一鵬、書言故事に禰衡鼓吏と題す。陶令は陶淵明、酒に酔

つては詩を作つたという。飲酒二十首并序あり。碧水鱸魚思

は李白の詩を指す。青山鵬鳥悲は漢の賈誼の鵬鳥賦を言

う。青山は墓所をいう。東坡の「青山可埋骨」（青山骨を埋

むべし）や僧月性の題壁の詩「人間到處有青山」（人間到處

処青山有り）の青山である。鵬鳥賦は文選に収められるが、

その序に長沙王の傅になつた時、部屋に鵬鳥が飛び込んで

来た。この鳥は不祥の鳥である。長沙は湿地であり、長寿

はかなわじと自ら傷悼してこの賦を作つたという。

三國志で有名な魏の曹操の時の方士左慈の話は一風変つ

ている。左慈については博物志にもその逸話が見られる

が、今、搜神記に目を向けよう。

左慈字元放、廬江人也。少有神通、嘗在曹公座。公笑

願衆賓曰、今日高会、珍羞略備。所少者、吳松江鱸魚為膾。放曰此易得耳。因求銅盤貯水、以竹竿餌釣於盤中。須臾引一鱸魚出。公大拊掌。會者皆驚。公曰、一魚不周坐客、得兩為佳。放乃復餌釣之。須臾引出。皆三尺余、生鮮可愛。公便自前膾之、周賜座席。：

左慈、字は元放、廬江（安徽省六安県の西）の人なり。少くより神通有り、嘗て曹公の座（宴席）に在り。公、笑ひて衆賓に顧みて曰く、今日の高会（盛宴）、珍羞（うまい料理）略備われり。少き所の者は吳松江の鱸魚の膾為りと。放曰く、此れ得るに易きのみと。因りて銅盤を求め水を貯へ、竹竿と餌を以て盤中に釣る。須臾にして一鱸魚を引き出せり。公大いに掌を拊てり。會者皆驚けり。公の曰く、一魚、坐客に周ねからず、兩つを得れば佳からんと。放乃ち復た餌して之を釣る。須臾にして引き出せり。皆三尺余、生鮮愛づ可し。公便ち自前にて之を膾にし、周く座席に賜はれり。：

ここで気になるのが三尺の鱸である。松江鱸といっているのであるが、すでに述べたように、数寸の鱸であるべきで、三尺ならば、スズキのことであろう。後漢書方術、左慈伝

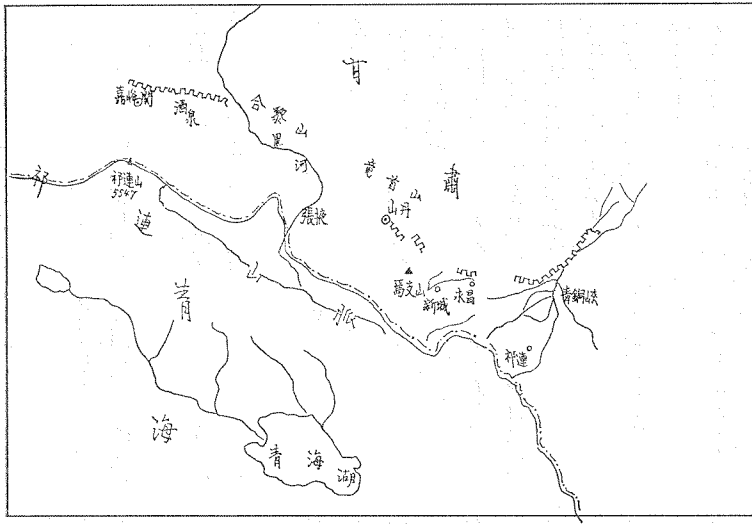
に於ても三尺余となっている。スズキのあら、いも美味であるので、ここで使われたのはスズキではなからうか、二匹くらいの松江鱸ではとても多数の宴席の用をなさない。しかし、これは話としてそつとしておこう。

平安期の作とされる玉造小町壮衰書（笠間書院刊）に「膾非鱸鯉之腴不管、鮓非紅鱸之鯁未味」（膾は鱸鯉（ひごい）の腴に非されば管めず、鮓は紅鱸の鯁に非されば味ははず）と書かれている。玉造小町が紅鱸の鯁を食したとは思えぬが、これは中国の故事によって書かれたものの例と言えようか。この物尽しの形式は文選の潘岳の賦等に見えるものであるが、日本でも食習慣にはなくても古くから松江鱸の事は知られていたであろう。和名抄鱗介部の鱸は鯉に似ているとし、和名須須岐と言っている如くスズキである。

四 燕支の山

杜審言の詩に贈蘇綰書記（蘇綰書記に贈る）と題する作がある。

知君書記本翩翩 知んぬ君が書記本と翩翩
為許從戎赴朔辺 為に許す戎に従つて朔辺に赴くを



燕支の山

紅粉樓中応計日 紅粉樓中応に日を計ふべし

燕支山下莫経年 燕支山下年を経ること莫かれ

この詩は杜審言が、書記として西北の節度使として出かける蘇綰に贈ったもの。燕支山は辺塞を連想させる山で、この山について歴史をたどってみたい。

古今圖書集成山川典、焉支山部に、「漢の將の霍去病の至りし所の焉支山。後漢の竇憲とうけんの登りし所の燕然山」といい、「焉支山は一に燕然山と名づけ、一に刪丹山と名づけ、一に山丹山と名づく。又、燕支山と名づく。今、陝西の山丹衛東南五十里に在り」とする。現在は甘肅省に属し、山丹という地名があり、新城の西北に焉支山があり、祁連山脈きれんの一支峰である。焉支・祁連は并称されること多く、并せ考えることにする。祁連山脈は祁連山（五五四七メートル）を主峰に古代西域の大山脈で、匈奴の地であり、その西端はシルクロードの要衝である玉門関、敦煌がある。また、甘肅省と青海省の省境でもある。太平御覽地部には燕然山、祁連山、焉支山を区別している。

焉支山

涼州記曰、焉支山在西郡界。東西百余里、南北二十里、有松栢五木（一本五本）、其水草茂美、宜畜牧。

与祁連同。一（二本一名）刪丹山

涼州記に曰く、焉支山は西郡の界に在り。東西百余里、南北二十里、松栢五木（木）有り、其の水草茂りて美しく、畜牧に宜し。祁連と同じ。一に刪丹山と名づく。

涼州記は晋の段龜竜の著になる。西郡の界とは武威郡との境界をいう。ここに焉支山がある。

祁連山

西河旧事曰、祁連山在張掖酒泉二界。焉支山在刪丹。

故東東西百余里、南北二十里亦宜畜。匈奴失二山、乃歌曰、亡我祁連山、使我六畜不蕃息。失我焉支山、使我婦女無顔色。

西河旧事に曰く、祁連山は張掖・酒泉の二界に在り。

焉支山は刪丹に在り。故に東の東西百余里、南北二十里の間も亦、（牧）畜に宜し。匈奴、二山を失ひ、乃ち歌ひて曰く、我が祁連山を亡ひ、我が六畜をして蕃息せざらしむ。我が焉支山を失ひ、我が婦女をして顔色無からしむ。

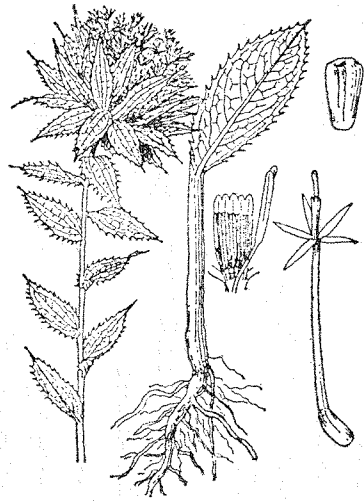
古の文にはやや理解しにくいところがあるが、次はその理解を助けるに役立つ文である。

涼州記曰、祁連山張掖酒泉二界之上、東西二百里、南北百余里、山中冬温夏涼、宜牧牛。乳酪濃好、夏写酪不用器物。刈草著其上不散。酥特好、酪一斛得升余酥。又有仙人樹、行人山中飢渴者輒食之飽。不得持去、平居不可見。

涼州記に曰く、祁連山は張掖・酒泉二界の上（はより）に在り。東西二百里、南北百余里の間、山中冬温かく夏涼しく、牛を牧ふに宜し。乳・酪濃好にして、夏に酪（う）を写すに器物を用ひず。草刈りてその上に著（お）けども散ぜず。酥（そ）（乳飲料）は特に好く、酪一斛（約二〇リットル）にて升（約〇・二リットル）余の酥を得る。また仙人樹あり、行人（たひび）山中に飢渴する者輒ち之を食ひて飽く。持ち去るを得ず、平居（ふだん）見る可からず。

西河旧事の匈奴の歌で婦女をして顔色無からしむと言わしめた理由は、婦女の化粧用の燕支（えんじ）（に）が二山を失うことにより入手できぬことをいう。この燕支については後述べる。

焉支・祁連は夏涼しく冬暖かく、牧畜に適していたらしいが、これについては論じない。酪は乳を精煉して作った濃い乳飲料。またチーズ。酥は酪を更に精煉した乳飲料。



紅花 *Carthamus tinctorius* L.
中国高等植物図鑑 (科学出版社)

仙人樹は仙人掌(サボテン)の一種か。

ここで、燕支について述べておこう。べにを指す燕支は燕脂、焉支、烟支等の字を当てるが、この燕支山で採れることからの命名だという。燕支は紅藍花 (*Carthamus tinctorius* L.) という植物を原料にする。紅花ともいわれ、アラブ、エジプトを原産とするが、燕支山麓で作られていたことも十分考えられる。この紅花が、シルクロードを通り、燕支山を通り中国へ伝えられ、やがては日本にも伝えられたのであるからすばらしい。平安時代の源順の和名抄調度部、図絵具に燕支が見え、「西河旧事云、焉支山出丹。今

案、焉支、烟支、燕支、燕脂皆通用」(西河旧事に云ふ、焉支山より丹を出す)。今案するに、焉支、烟支、燕支、燕脂皆通用す」と言っており、はやくから中国の燕支が知られていたことがわかる。今、本草綱目の紅藍花と燕脂の記事を引いておこう。

紅藍花(宋開宝)

(釈名) 紅花(開宝)。黄藍、頌曰、其花紅色、葉頗似藍。

故有藍名。

(集解) 志曰、紅藍花即紅花也。生梁漢及西域。博物志

云、張騫得種於西域。今魏地亦種之。：

(釈名) 紅花(開宝) (馬志開宝本草)。黄藍、頌(蘇頌)經本

草) 曰く、其の花紅色、葉は頗る藍に似たり。故に藍の名有り。

(集解) 志(馬志開宝本草) に曰く、紅藍花即ち紅花なり。

梁・漢及び西域に生ず。博物志(晋の張華撰) に云

ふ、張騫、種を西域に得たり。今魏の地にも亦之を種

ゆ。：

花の栽培方法、燕支の製法も説かれるが省略する。博望侯張騫は前漢の探險家でシルクロードの開拓者で有名。種を持ち帰ったということはありそうなことである。後には

中国各地で栽培されたという。次に燕脂の項を見よう。

燕脂爛泪

(釈名) 輕枝。時珍曰、按伏候中華古今注云。燕脂起自紂。以紅藍花汁凝作之、調脂飾女面。産於燕地。故名燕脂。或作輕枝。匈奴人名妻為閼氏。音同燕脂。謂其顔色可愛如燕脂也。俗作臙支。胭支者並謬也。

(集解) 時珍曰、燕脂有四種。一種以紅藍花汁染胡粉而成。乃蘇鶻演義、所謂燕脂葉似薊、花似蒲。出西方。

中国謂之紅藍、以染粉為婦人面色者也。：

(釈名) 輕枝。時珍曰く、按ずるに伏候の中華古今注(燕支)に云ふ。燕脂は紂より起れり。紅藍花汁を以て凝して之を作り、脂を調じて女の面を飾る。燕の地に産す。故に燕脂と名づく。或は輕枝に作る。匈奴の人妻を名づけて閼氏 *hianstie* と為す。音が燕脂と同じなり。其の顔色愛づ可きを燕脂の如しと謂ふなり。俗に臙支・胭支に作るは並びに謬りなり。

(集解) 時珍曰く、燕脂に四種有り。一種は紅藍花汁を以て胡粉を染めて成る。乃ち蘇鶻の演義(蘇氏演義)に所謂の燕脂の葉は薊に似、花は蒲に似たり。西方より出づ。中国之れを紅藍と謂ひ、以つて粉を染め、婦人

の面の色を為る者なりと。

燕支を燕の國産とするのは問題ではあるが、燕は北方の國であり、はやく燕支が伝わっていたことは考えられる。閼氏は匈奴の単于の妻の呼称。燕脂の花が蒲に似ているという記事は解せない。蒲はガマないしはショウブの意で燕支の花はアザミに似ている。蘇鶻は唐の人。蘇氏演義は晋唐割記六種(世界書局)所収。